

史跡古津八幡山遺跡弥生の丘展示館 企画展1

古津八幡山古墳の築造と復元整備

展示解説パンフレット

【開催趣旨】

古津八幡山古墳は直径 60m の新潟県最大の大型円墳です。復元整備のための発掘調査によって、この巨大な古墳の築造方法が明らかになりました。本企画展では築造方法に焦点を当て、選地から完成までの流れやつくり方の特徴などについて見ていきます。

また、4 月 17 日から公開される古津八幡山古墳の復元整備工事の概要についても説明します。

【古津八幡山古墳の概要】

古津八幡山古墳は、平成 23～25 年度に行った発掘調査の結果、直径 60m の巨大な円墳であること、古墳の斜面中ほどに幅約 4～5 m の平坦面（テラス）が巡ることなどが明らかになりました。古墳の南西部には巨大な周濠が掘られており、周濠を掘って出た土をおもに利用して古墳を高く築いていることが分かりました。また、古墳の南東部にも周濠が掘られていました。周濠と周濠の間は途切れており、通路として利用された可能性があります。

古墳のつくり方の特徴や出土遺物から、古津八幡山古墳は約 1600 年前（古墳時代前期の終わりと中期の初め）につくられた古墳であると考えられます。蒲原平野は新潟県内で古い時期の古墳（前期古墳）が集中してみられる地域です。古津八幡山古墳は県内の古墳の中では最大級の大きさの古墳で、蒲原平野の各地域の豪族が共同して推し立てた王（有力な豪族）の墓であった可能性が考えられています。



復元整備後の古津八幡山古墳

【古津八幡山古墳をつくる前の地形】

発掘調査によって古墳をつくる直前の地形が明らかになりました。全体を通して平坦でないことから、古墳をつくる前に地表面の大規模な整地は行っていないと考えられます。また、地表面で灰や炭は検出されておらず、古墳をつくる際に草などの焼き払いなどは行っていないと推測されます。

古墳をつくる前の地表面の標高からは、古墳の中心域から南側（3・5・12T）にかけて最も高く、古墳の選地にあたり地形の高い場所を古墳の中心域とした可能性が考えられます。

また、北側のテラス部分では尾根筋の北西方向に向かって急な傾斜で下降する地形であったことも分かりました。テラスはこの斜面域に位置しており、地形も考慮して古墳が造られていることが推測されます。

【古津八幡山古墳の盛土と周辺の基盤層】

古津八幡山古墳の築造に利用された盛土は、色や砂・粘土といった違いなどで大きく下の4種類に分けられます。

1. 黄系色の粘土質の土 2. 黄系色の砂質の土 3. 赤系色の粘土質の土 4. 黒系色の粘土質の土

1～3が基盤層主体の土で、4が築造前の地表面主体の土です。実際はマンガンなどの鉱物の有る無しや、多い少ない、またそれぞれの土を混ぜ合わせたりする場合もあるため、さらに細かく分けることが可能です。古墳をつくる際に、盛土を細かく選別して計画的に利用したことが分かりました。

【古津八幡山古墳のつくり方】 ※丸数字は右頁の下図に対応

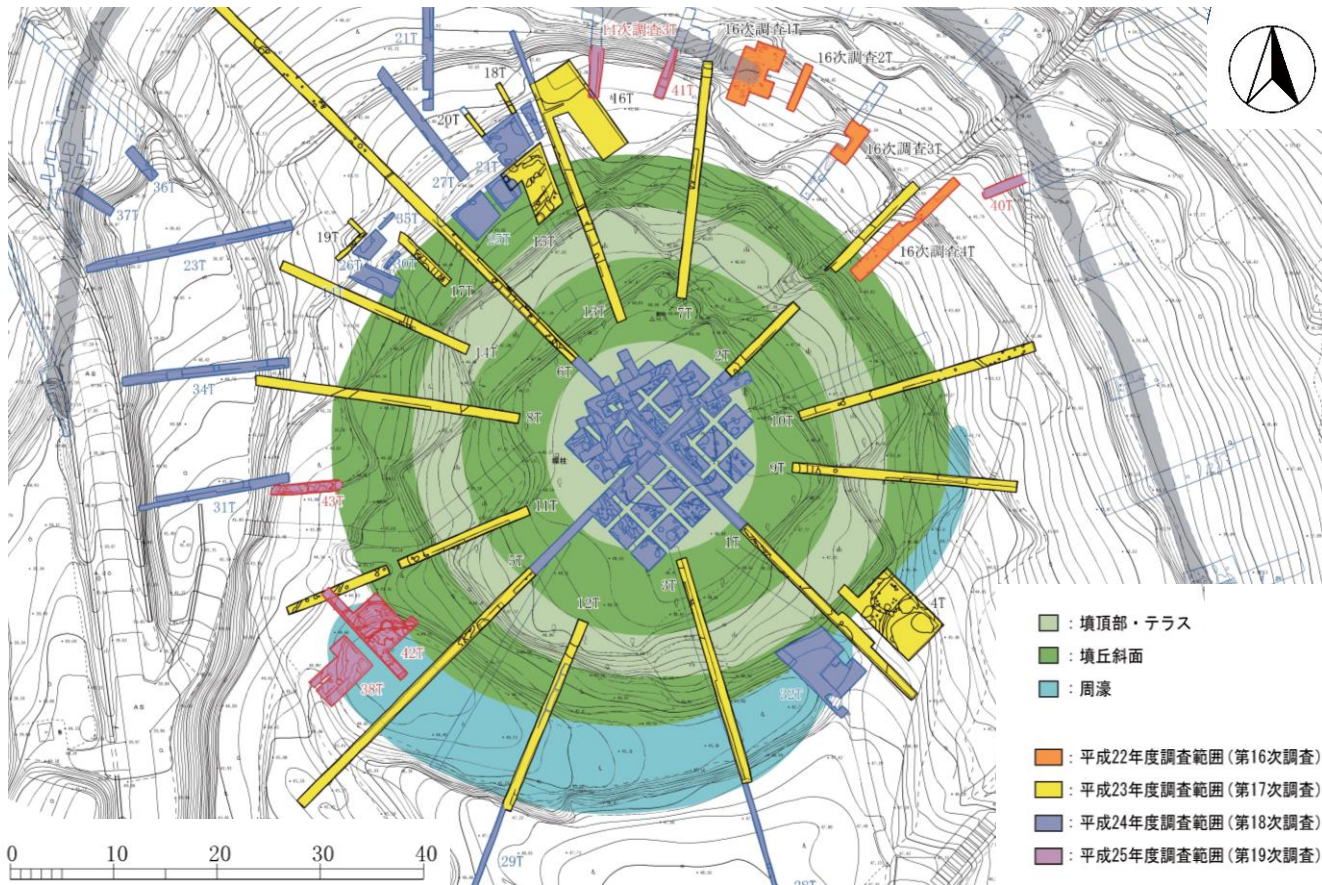
もともと地形が高い部分を古墳の中心に決め、まず地形の低い北側の斜面域を中心に土を盛って古墳の下段斜面とテラスをつくっていきます（②～④）。その際、テラスの外端に土手状の盛土を行っています（③）。また、テラスの内端（後の上段斜面の外縁下部分）にも、土手状の盛土を行っており（③）、上段斜面をつくる際の目印とした可能性が推測されます。これら土手状の盛土には、赤味が強く粘り気のある土を選んで使用していました。その後、土手状の盛土の上端の高さで、南側とおおむね平らになるよう土を充填します（④）。この面がおおむねテラスとなります。テラスは南側から北側にかけて緩い傾斜があり、築造前の地形の影響を受けていると推測されます。

続いて墳丘の上段部分をつくっていきます（⑤～⑪）。まず中心部分に小丘を築きます（⑤）。小丘は築造前の地表面の黒色の土が主体でした。地表面の土が主体の盛土はこの小丘に限られます。その後、小丘から外側に向かって土を覆っていきます（⑥）。なお、この後につくられる上段斜面の下の方位置にあたる外縁部分の盛土は、他の盛土より特に固く仕上げられていました。外縁部分の基盤にあたる場所を強固に仕上げていたことが分かります。

次に上段斜面にあたる外縁に土手状の盛土を行います（⑦）。そして小丘と土手状の盛土の上端の高さで土を充填して平らにします（⑧）。この平らな面（工程面）の土は固く締まっていた。この高さで平らに土を締め固めた可能性が考えられます。なお、土手状の盛土は他の盛土よりも固く、古墳を強固につくるために、古墳の外縁部分を他よりもしっかりと仕上げたといえると考えられます。

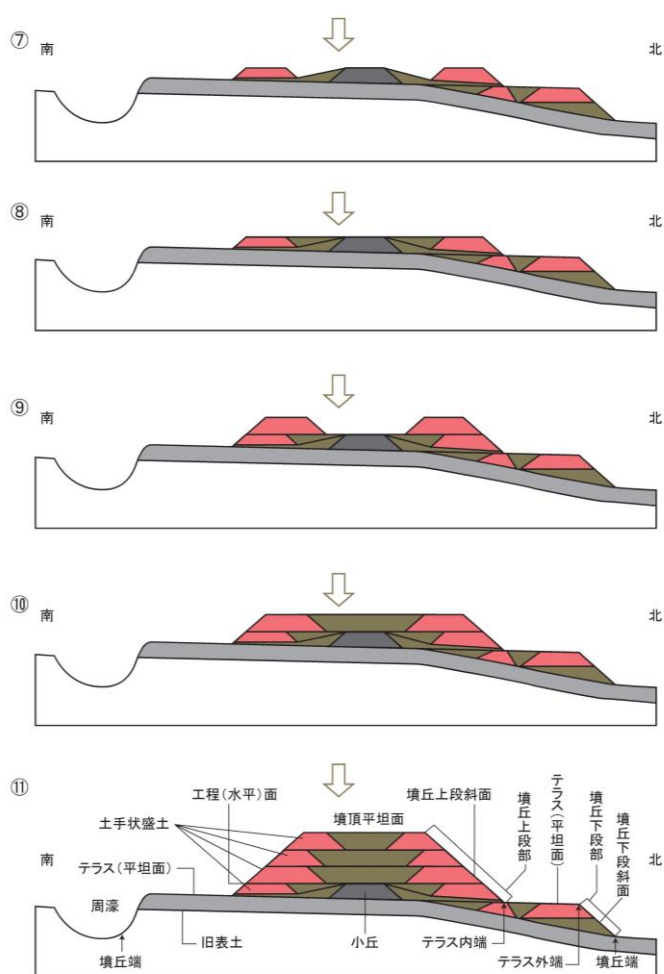
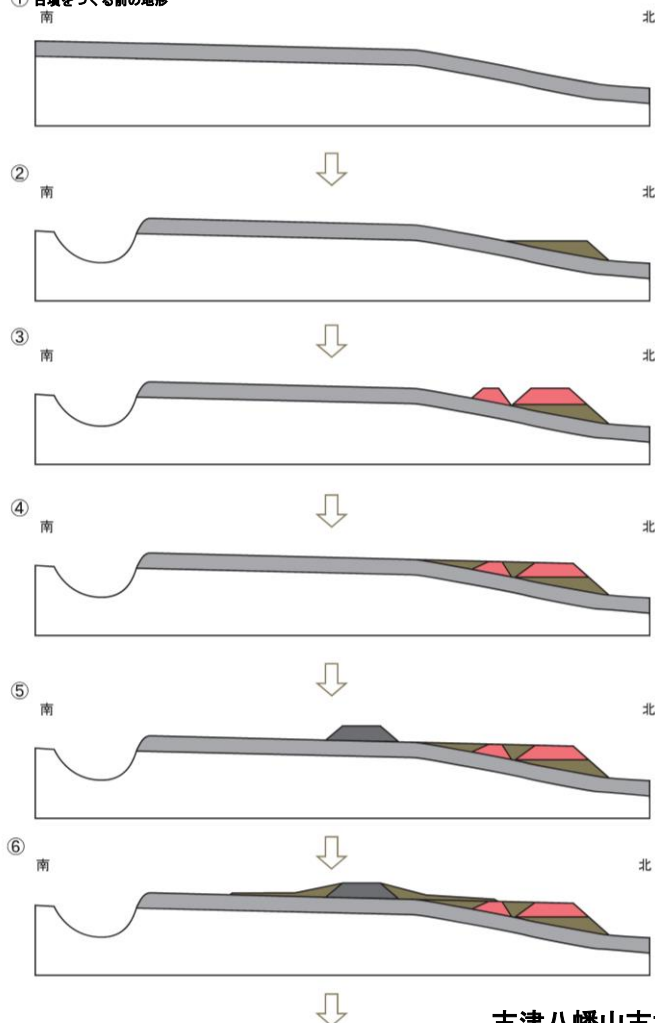
その後、外縁に土手状の盛土を行います（⑨）。さらに土手状の盛土の上端の高さで平らにします（⑩）。このような工程を繰り返すことで、古墳を高く築いていました（⑪）。

古津八幡山古墳のつくり方には、東日本の墳墓で古くからある築造のしかた（小丘を築くということなど）と、畿内などの墳墓の多くで古くからある築造のしかた（土手状の盛土、平らな工程面など）の両方が確認されました。このことから、畿内から技術者が派遣されてきて、在地の技術者と一緒に関与して古津八幡山古墳をつくった可能性が指摘されており、古墳に葬られた豪族が畿内の豪族と関係をもっていた可能性が推測されます。



古津八幡山古墳復元平面図

① 古墳をつくる前の地形



古津八幡山古墳のつくり方模式図

【古津八幡山古墳前後の土地利用】

古津八幡山古墳のある場所は、時代によってさまざまな土地利用が行われてきました。古津八幡山古墳がつくられる前の弥生時代後期（紀元前後から西暦 250 年頃）には、丘陵上の周囲に濠をめぐらした大規模なムラ（高地性環濠集落）があり、これまでの調査で竪穴住居 51 棟、方形周溝墓 3 基、前方後方形周溝墓 1 基などがみつかっています。方形周溝墓の木棺の中から出土した鹿の角で作られた柄の付いた鉄剣（鹿角装鉄剣）は、当時有力なムラ長がいたことを明示しています。

また、古墳が築かれてからおよそ 300 年後の奈良時代から 700 年後の平安時代の終わりまで、古墳のある丘陵北西麓の金津地区では製鉄（製錬）が盛んに行われており、蒲原郡における手工業生産の一大基地となっていました。「金津」という地名はこの鉄づくりに由来すると考えられています。古津八幡山古墳でもその頃の活動の痕跡が確認されています。

明治 6（1873）年から明治 11（1878）年頃につくられたと考えられる個人所蔵の実測図には、古墳の頂上などに「八幡社境内」との記載があり、明治初め頃まで頂上周辺は八幡社境内として利用されていたと考えられます。

昭和 17（1942）年には食糧難を背景に、畑地を確保する目的で古墳やその周辺で大規模な切り盛りが行われました。昭和 51（1976）年から平成 13（2001）年までは、古墳頂上に環境庁の大気観測所が設置されていました。



古墳の盛土下でみつかった
弥生時代の竪穴住居跡



古津村実測図（個人蔵）

【古津八幡山古墳の復元整備】

古津八幡山古墳の復元整備工事は、平成 23～25 年度に行った確認調査の結果にもとづき、平成 25・26 年度に行いました。後世に検証ができるよう整備前の地形を極力削らない方針のもと行い、古墳部分は基本 1 m の厚さの保護盛土で覆っています。古墳の北から東に存在する弥生時代の環濠については園路として標示しました。また、保護盛土が流れないように古墳の斜面にコグマザサ、他は芝で植栽を行いました。

☆お知らせ ☆

※新潟市文化財センター学芸員による展示解説

日 時：2015 年 5 月 6 日（水 祝日）13:30～15:30 （弥生の丘展示館・申込不要）

史跡古津八幡山遺跡 特別企画展 1「史跡古津八幡山遺跡の発掘調査と復元整備の歴史」

■会 期：2015 年 4 月 21 日（火）～5 月 6 日（水）（会期中無休）

■会 場：新潟市新津美術館市民ギャラリー

※新潟市文化財センター学芸員による展示解説

日 時：2015 年 5 月 3 日（日）13:30～15:30 申込不要

☆関連講座「古津八幡山古墳の過去と未来－歴史的意義と保存活用－」

日 時：4 月 29 日（水 祝日）13:30～15:30

講 師：若狭 徹氏（高崎市教育委員会）

場 所：新潟市新津美術館レクチャールーム

参加費：無料

定 員：80 名（申し込み不要、当日直接会場へお越しください。）

今回は、弥生の丘展示館企画展 2「蒲原の王墓 古津八幡山古墳と豪族の屋敷」を 7 月 7 日（火）～10 月 4 日（日）の間、開催します。